県 外 派 遣 報 告 書

審判員名（報告者）	藤林　比登美	所　　属	U18 カテゴリー
大 会 名	令和　8 年度　全国高等学校総合体育大会　バスケットボール大会		
期　　間	２０２６年　7 月 28 日　～8 月 2 日（参加日：7 月 28～30 日）		
会　　場	Asue アリーナ／HOS 住吉スポーツセンター／大浜だいしんアリーナ		
ス ケ ジ ュ ー ル			
期　　日	内　　容		場　　所
7月　２１日	審判会議、研修会		ZOOM 会議　参加者自宅他
7月　２８日	1 回戦		Asue アリーナ
7月　２９日	2 回戦		HOS 住吉スポーツセンター
7月　３０日	3 回戦		Asue アリーナ
審判会議、研修会　講義内容			

●『ビックマンに対するコンタクト」 堀内　純氏（講師・愛媛）

Rough ではなく、Tough で誰もがワクワクする試合を目指す

① 高さや幅（身体的な特徴）

② ミスマッチ（サイズの違い）

③ 戦術（SCR、オフェンス、W チーム、zone…）

★シンプルなプレーコーリング

そのために・・・ ☞レフリーディフェンス、ポジションアジャスト

ゲームに対してのインパクト／ベーシックなメカ／高さのアドバンテージ／ビックマンの強み／オフボールでの絡み／ビックマン VS ビックマン／プレーの予測　などを理解し、整理する。

※ビックマンだけに注目するということではなく、存在そのものにインパクトがあるということを知っておく。

●『処置ミス　ゼロを目指して』 村上　恵美氏（講師・神奈川）

ゲーム中に起こる多くは、「ヒューマンエラー」

※能力不足ではなく、人間誰でも起こりうるもの。

特に、I H などの大舞台では、

ゲームレベルが高い／観客の数が多い／メディアや配信がある／チームからのアピール強度が上がる

など、多くの情報処理が求められる環境下である。

確認するべき情報は多くある。

「見たものより見たいものを優先する」

TO　meeting の重要性

「処置ミスゼロ」は、一人の力ではなく、クルー全員で作り上げる。

●『本大会に向けたプレゲームカンファレンス』 久米　克弥氏（本部・秋田）

全審判員の代表としてコートに立つという自覚。
メカニクス、マニュアル、ルール、インプリに則った適切な処置や対応　☞スムーズなゲーム運営。

「タフでフィジカルなゲームを目指す」
プレーコーリングの精度が大切　イミディエイトホイッスル・ケイデンスホイッスルの使い分け。
笛を入れるまでの幅を広く持つことで、色濃いメッセージを。

メカニクス
① セットアップポジションからのレフェリング
② エッジ（コーナーショット）リードとトレイルの協力（Basic/Advance）
③ アクティブセンター（３PO の生命線）
④ チェックイン／チェックアウトのタイミング
⑤ オールコートカバレッジ　EOG/EOQ に関わる部分
⑥ リバウンドカバレッジ　ビーナスシュチュエーションに関わる部分
⑦ フリースローカバレッジ　過去の判定・判断ミスの例多い
⑧ ３or２カバレッジ　得点に関わる部分
⑨ UF クライテリア：Ｃ１～Ｃ４（クルーコミュニケーションの方法等）

担当試合①	
期　　日	７月２８日（火）　１回戦
対戦カード	大阪桐蔭高等学校（大阪）vs 星槎国際湘南高等学校（神奈川）
ク　ル　ー	CC：野﨑　梨奈氏（宮城）　U1：藤林　比登美（埼玉）　U2：横井　尚子氏（三重）
ミーティング内容	審判主任：―

▶ゲーム前の PGC
・ベーシックなメカニクスの確認。
・チームスカウティング情報の共有。
・留学生に対して、ペイント内の整理。

▶ゲーム後のミーティング
・留学生 vs 日本人のマッチアップについて、シンプルに笛を入れて良いケースも。
・後半にかけてチームが判定にアジャストしてくれたが、前半のリバウンドやトラベリングなど細やかに判定をしたかった。
・プレーへの影響を見て、ペイシェントできるケースもあった。
・こちらの意図と、ベンチの気持ちをもう少し共有できるとよかった。

担当試合②	
期　　日	７月２９日（水）　２回戦
対戦カード	千葉経済大学附属高等学校（千葉）vs 柴田学園大学附属柴田学園（青森）
ク　ル　ー	CC：藤林　比登美（埼玉）　U1：三木　大助氏（鹿児島）　U2：北山　拓海氏（兵庫）
ミーティング内容	審判主任：梅田　香氏（福井）

▶ゲーム前の PGC
「タフでフィジカルなゲームを目指す」

・ベーシック、プレーコーリングの確認

・チーム情報、試合展開についての確認。手の整理をして、タフなゲームへ。

▶ゲーム後のミーティング

・手の使い方を整理しようという意思は伝わるが、決断が早いケースがいくつかあった。

・ダブルで鳴るケースのプライマリーの確認。

・イミディエイトホイッスルとペイシェントホイッスルの使い分け。

・ゲームを感じながら、何に笛を入れるのか。（手の使い方、ポストアップへのメッセージの伝え方など。）

・CC としての存在感の出し方。

担当試合③

期　　日	7月３０日（木）　３回戦
対戦カード	新潟産業大学附属高等学校（新潟）vs 京都精華学園高等学校（京都）
ク　ル　ー	CC：塩谷　禎氏（JBA）　U1：久保　理恵氏（香川）　U2：藤林　比登美（埼玉）
ミーティング内容	審判主任：小澤　朋克氏（群馬）

▶ゲーム前の PGC

日本のトップレベルのオンザコートに立つ責任と自覚を持ってトライ！

「タフでフィジカルなゲームを目指す」

大事なのは、

①　ゲーム　②クルー　③自分　　※自分のエゴを捨てる。

・ベーシックなメカニクスの確認。

・チームスカウティング情報の共有。

・映像を観ながら、起こり得るプレーの予測と備えを行った。

▶ゲーム後のミーティング

・ショットクロックの訂正などクルーで協力してできた。

・明らかなものに対して、一試合を通してプライマリーのレフリーがコールをできた。

・フラストレーションが溜まっていたプレイヤーに対しても、コミュニケーションが取れた。

→ 一方で、あまり付き合いすぎず、メッセージを伝える方法もあるということをご指摘いただいた。

・全体として、クルーで協力してゲームを運営できた。

全体の感想

今回、インターハイへ派遣していただき、全国トップレベルの試合を担当できたことを大変光栄に思います。また、３回戦まで割り当てをいただき、２回戦ではクルーチーフを務める機会をいただいたことで、自信に繋げることができました。そして、関東ブロックを超え、全国大会の場でしかお会いすることのできない審判員の方々とクルーを組ませていただき、多くの考え方やゲーム運営について触れることができたことも、大変貴重な機会となりました。全国各地の審判員の皆様の姿勢やゲームや審判への向き合い方から大きな刺激を受けるとともに、自分自身の審判を見つめ直す貴重な機会となりました。

今回の経験を糧に、このような全国トップレベルの舞台で再び審判を務めることができるよう、今後も自己研鑽に励み、より信頼される審判員を目指して努力してまいります。

最後になりますが、大会開催にあたりご尽力いただいた大阪府バスケットボール協会をはじめ、大会関係者の皆様、講師の皆様、審判員・TO クルーの皆様、日頃よりご指導いただいております埼玉県審判員の皆様に心より感謝申し上げます。